

「帯江研」だより

Vol.9

2023/12 発行

帯江鉦山研究会事務局

岡山県総社市門田213 小西伸彦方

E-メール

falbo524@gmail.com

つつじ山再生プロジェクトのご紹介

竹井皓三

(つつじ山再生プロジェクト代表)

このプロジェクトは平成12年に中庄の歴史を語り継ぐ会の会合の中で、中庄がつつじの名所であったという昔の新聞記事を読むことによって、「つつじ山を復活してみよう」という声の中で、発足しました。

その記事の中には「つつじの咲く時期には倉敷町内から東の方向を見やると、帯江方面の山（現ゴルフ場）が全山燃えているように赤く染まり、倉敷町内の人々はこぞって手弁当を下げて、東の方角を目指し列をなし花見見物に向かっていったという記事が載っていました。また「倉敷音頭」の制作を依頼して作詞された北原白秋の歌詞の中にも「帯江の洗わず観音」とともにツツジの名所であることが語られています。

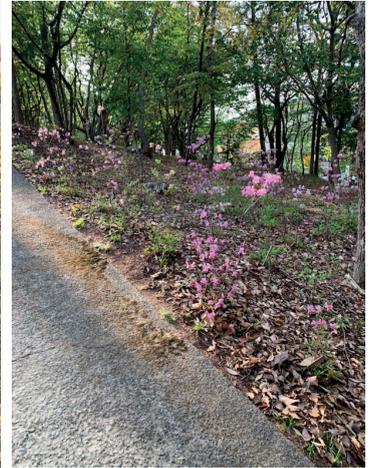
コバノミツバツツジが咲くのは三月中旬から五月中旬にかけてであり、その後四月五月ごろに咲くモチツツジという少し花の色が薄い種類が咲きますが、花の色も違いますが、花の姿も少々違います。この時期は花見にはちょうど良い気候でもあり、数多くの花見見物客がいたであろうことは想像に難くない。しかも、このツツジの特徴でもある葉が出そろう前に、花がすべて咲きそろうために、遠目にも非常に美しく見えたのではないかと思います。

当初私たちはこのようなツツジの咲き誇る中庄を復活したいとの思いで、ツツジ山再生プロジェクトを立ち上げたのですが、倉敷市立自然史博物館の狩山学芸員（当時）に相談したところ、もともと中庄に自生しているツツジを復活するのであれば、再生ということになるとの言葉をいただき、再生活動に取り組むこととなりました。つまり、他所から苗を移入するのではなく、銅山のツツジから種を採取し発芽させて増殖を図るという方法を採用することにしました。

しかし、この決断は大きな誤算でありました。つつじの種の発芽率が当初非常に悪くほとんどの会員が失敗をしました。また、発芽しても生育の状況は極めて悪く、苗の増殖には会員一同お手上



熊野神社東側植栽地



熊野神社境内植栽地

げの状態でした。しかし、ここで諦めるわけにもいかず、会員の中にはこのような園芸に長けた者が様々な工夫を試してみ、少しずつその方法を会員のなかに広めながら苗づくりを拡げてまいりました。現在では大半の会員が、苗づくりがうまくなり増殖の方向性に光が見えてきたところです。

ところで、私たちのグループが様々な点でご指導いただいている岡山理科大学名誉教授波田善夫先生の論文によれば、コバノミツバツツジは非常に土地の状況が悪いところで繁殖する傾向にあり、鉦山の跡地や災害が起きた後の荒れた土地に根づいて繁殖するようで、私たちの増殖活動はどのような方向へ進めばよいのか途方に暮れる部分があります。会員の中には、肥料のやり方による成長の比較をした者もあり、この場合は確実に施肥をしたほうがよく育つとの報告もあり、どちらが良いのかを安易に判断するのは困難な気がしました。ただ、種まきも、大きくするにも土壌は少し酸性になったほうが安定しているように思えます。この点も、銅山跡に名所ができた所以かなとも思いました。

ところで、コバノミツバツツジとは学名で、*Rhododendron reticulatum*. と呼ばれ、日本では中部地方から九州地方まで広い範囲での生息が確認されていますが、近縁種も多いため、同定はなかなか困難です。花弁は5枚で、上方に3枚下方に2枚で、めしべが1本おしべが長いのが5本短いのが5本で、計10本あります。

このツツジも属しているのがミツバツツジと呼ばれる種類で、花の色や葉っぱの形もよく似ているようですが、少し大きめのひし形に近い形です。ミツバツツジの中には白い花の種類もあり、同定は非常に困難です。

さて、私たちの活動も、



自動車学校カラミの植栽



第1回中庄ツツジ祭りのポスター

十有余年が過ぎましたが、本来の目標にはなかなか近づくことができません。その最大の課題が、元ツツジが咲き誇っていた土地が、同和ホールディングのもので、勝手に山地に手を加えることがかなわないことです。そこで、別紙地図のように、中庄の地区を通り抜ける道を指定し、その道路の周辺の空き地や住宅の敷地などにこのツツジを植えていただき、また途中の休憩場所を設定し、植栽地の案内をするなどの方法で、かつて、ツツジの咲き誇った場所であることをアピールできたらと考えています。



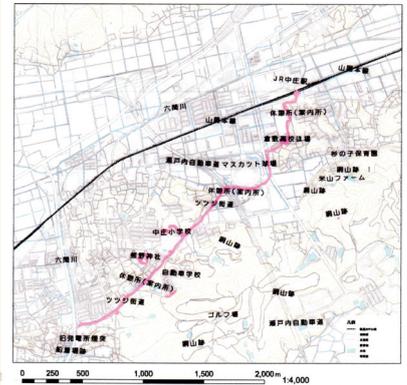
熊野神社境内植栽地



種子採取会

この道路の傍とはいきませんでした、自動車学校やゴルフ場などには相当数の植栽をしています。また、熊野神社や中庄小学校には合わせて、数百本の植栽を終えています。このような場所を今後も増やしていくことによって、つつじ街道の整備を図っていこうと考えているところです。

つつじ街道想定地図



※ 休憩所・案内所・・・今後の植栽状況・地域の希望により変更の可能性あり

中庄の山に生えるツツジ

狩山俊悟

(倉敷市立自然史博物館友の会)

私は倉敷市加須山の生まれで、幼少期の昭和40年(1965)前後には父親に連れられて付近の山を歩いたり、子どもたち同士で山の中を駆け回ったりしていました。帯江小学校の遠足で行くのは向山で、昼食は樹木の少ない、見通しのきく林内を選んでとっていた覚えがあります。

その頃の中庄の山がどのような様子であったかは記憶がないのですが(子どもたちだけで水晶を探しに行き、そのあとの朝礼のとき全校児童の前で先生から叱られた記憶はあります)、おそらく帯江の山と同じように、あまり大きな木はなく、低木はあるけれどもどこでも林内を歩けるようなところだったのだと思います。

今から考えると、あまり大きくなかった木はアカマツ、その下の低木はコバノミツバツジをはじめとするツツジ科の樹木(ヤマツツジ、ナツハゼ=ガンスともヤマナスビとも、シャシャンボ、ネジキ)、ヒサカキ=シャシャキ、ガンピ、ヤマウルシ、コックバナウツギ、コバノガマズミ、コウヤボウキ、タラノキ、ツクシハギ、ナワシログミなどだったのでしょうか。おそらくアカマツ林内が一年で一番華やいだのは、コバノミツバツジの咲く4月ごろだったと考えられます。

岡山県に自生が知られるツツジ科ツツジ属植物は、ゲンカイツツジ、ホンシャクナゲ、レンゲツツジ、ツリガネツツジ、モチツツジ、キシツツジ、シロバナウンゼンツツジ、ヤマツツジ、ダイセンミツバツジ、ユキグニミツバツジ、コバノミツバツジ、バイカツツジの11種1変種です。

このうち中庄の山に生育するのは、コバノミツバツジとヤマツツジの2種です。「レンゲツツジがかつてあった」という話を聞いたことがあるのですが、確かな標本は残されていません。付近の公園や民家にはサツキ、ヒラドツツジ、キリシマツツジなどが見られますが、これらはもともと岡山県に自生しない栽培種です。

山に生えるツツジということから、コバノミツバツジのことを「山つつじ」と呼ぶこともあるのですが、「ヤマツツジ」と和名のつけられた植物が別にありますので注意が必要です。中庄の山に生えるコバノミツバツジとヤマツツジの主な区別点は次のとおりです。



コバノミツバツツジ(写真1)



ヤマツツジ(写真2)

コバノミツバツツジ(写真1)

葉は春に一度出て枝先に3個輪生、広卵形~ひし形状卵形、裏面に網目状の細脈が目立つ。花は紅紫色、3~4月に咲く。おしべは10本(倉敷市中庄、2012年4月15日撮影)

ヤマツツジ(写真2)

葉は春と秋の二度出て互生、だ円形~卵状だ円形、裏面は光沢があり、網目状の細脈はない。花は朱色、4~6月に咲く。おしべは5本(倉敷市向山、2023年5月11日)

●あとがき

「帯江研だより」Vol. 9には、竹井皓三つつじ山再生プロジェクト代表と、倉敷市立自然史博物館学芸員時代につつじ山再生プロジェクトにツツジのご指導をなされた狩山俊悟倉敷市文化財保護審議会委員が原稿をお寄せくださいました。『明治四十三年陸軍特別大演習寫真帖』の写真をみると、帯江鉦山の周辺は銅製錬の煙害で樹木は枯れ、地肌があらわになっています。大演習から90年が過ぎた2000(平成12)年、「つつじ山を復活してみよう」と始まった再生プロジェクトの活動により、鉦山跡の春はツツジの鮮やかさに包まれ、たくさんの鑑賞者を迎えています。ツツジが咲く頃、坂本金彌が経営した帯江鉦山の遺構を訪ね、中庄の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。



都窪郡中庄村帯江鉦山「明治四十三年陸軍特別大演習寫真帖」(岡山県、1910年)